

宮城県農業協同組合中央会第五代会長

木村 秀壽

「私は百姓」の誇りを胸に
敢然と逆風に立ち向かう

【きむら しゅうじゅ】

-
- 1914(大正3)年 7月15日、鳴瀬村下新田
(現加美町)に生まれる
1936(昭和11)年 鳴瀬村産業組合に奉職
1957(昭和32)年 鳴瀬村農業協同組合専務理事
1969(昭和44)年 中新田町農業協同組合組合長
1978(昭和53)年 宮城県農業協同組合中央会第五代会長
1980(昭和55)年 全国農協中央会理事
1981(昭和56)年 農協米穀対策中央本部副本部長
1987(昭和62)年 9月23日死去

葉は落ちて根に還り養分となる

「葉落帰根」は、中国の禅僧慧能の言葉と伝えられ、葉は自然と落ちて根に還り養分となる、または、いつか故郷に帰るという意味で人口に膾炙する。

木村は戦時中に中国大陸でこの言葉を知り、生涯、座右に置いた。人を思いやる心、百姓であることの誇り、故郷への思い、すべてを包み込んだ上で、そのとき居る場所に情熱を傾けた。

農協人としての木村の源流は、鳴瀬村産業組合と復員後の農村再建活動にある。

一〇代の終わり、経済的な理由で盛岡農林高等学校（現岩手大学）を中退した木村は、農作業のかたわら鳴瀬川で砂金掘りをして家計を助けた。しかし困窮した生活に冷害が追い打ちをかける。日々の食べ物も事欠くなか、木村は「農民は一人では駄目だ。百人、五百人と力を合わせれば信用力も高まり、理想の農村をつくれるはずだ」との思いを持つ。

一九三六（昭和一一）年、高利貸や悪徳米肥商人の横暴から農村を守ろうとの決意を胸に、鳴瀬村産業組合に奉職した木村は、産業組合の置かれた厳しい環境に悪戦苦闘しながら、夜は一人でも同志を増やそうと村の青年たちを集め語り合った。

昭和一四年、現地の人心安定を任務とする宣撫班の一員として中国に渡り、終戦の直前に原隊復帰。ふたたび農業に従事する。

「貧乏人がいないふるさと、無学の人がいないふるさと、病人のいないふるさとを俺たちの手でつくっていかねければならない」

村の仲間と仏教青年会を結成し、戦後の農村の窮状を打開するため農業再生に取り組み一方で、空き地などでの野菜づくりを奨励し、野菜栽培組合をつくって野菜生産の先進地視察にも赴いた。

農業再生が口だけでないことは、木村の田んぼを見れば分かったという。旧友のひとは「木村さんの田んぼはいつも畦畔の草がきれいに刈り取られ、他の模範だった」と回顧する。

経営の複合化を目指す

昭和二四年、木村は鳴瀬村農業協同組合の理事に当選。新河原開田組合をつくって鳴瀬川の堤外畑に二〇ヘクタールの水田を拓き、「大勢で力を合わせれば河川敷にも田んぼができる」と、普段口にしている協同の理念を実践してみた。下新田蔬菜組合を結成し、ネギ苗の片屋根栽培の普及や優良種子の導入に力を入れたのもこのころである。

数々の取り組みが評価され、鳴瀬村農協は昭和三三年に「全国優良農協」の表彰を受けている。

議論が好きで、専務理事になっても「一〇年先の農業はどうなる」「所得向上に役立つ作物は何か」と職員へ問いかけた。常に職員のなかに身を置き、一緒にものを考えた。自ずと信頼が集まり、大崎、遠田の農協からも一目置かれるようになっていた。昭和四一年、木村は農協の理事たちに推されて組合長に就任する。

木村には専務理事時代に温めていた開発プランがあった。当時農業は稲作の機械化や出稼ぎ者の増加などで畑の開墾が後手にまわっていた。

「町内の林野を開墾して畑にすれば、経営を複合化できる」

木村は、中野地区にある町有林二九・四ヘクタールの払い下げを受け、中野畑作パイロット事業に着手する。参加農家は二七戸に厳選し、切り拓いた畑にまずアスパラガスを植えた。これは土壌の問題で失敗したがその後も加工トマト、採種用ダイコン、葉タバコなどさまざまな作物を導入していった。

さらに「これからは米だけではダメだ、野菜も畜産もやろう」と複合経営を説いた。養豚部会の会員は、木村が「市場まで足を運んで、中新田の豚をよろしく頼みますとひとり一人に頭を下げてくれたことが忘れられない」と語っている。

しかし木村の思いとは裏腹に、専業農家の減少は止まらず農村の都市化は進む一方だった。危機感を抱いた木村は、地場農産物の良さを伝えていくことのできる農協経営のスーパーマーケット「くみあいマーケット」をオープンする。農協組合員がつくった新鮮な野菜を店頭に並べ、馴染みの薄い野菜は料理教室を開いて普及に努めた。朝、

採った野菜を夕べに食べることでできる産地直送方式が地域の住民に喜ばれ、売上げは順調に伸びていった。

組織も、中新田・広原・鳴瀬三農協の合併による中新田町農業協同組合（現JA加美よつば）の誕生で経営力強化が図られた。

同時に、木村の活躍の舞台は宮城県の農協全体を率いる場へと広がっていく。宮城県農業協同組合長会会長、そして宮城県農業協同組合中央会（以下県中央会）第五代会長へ。大役を拝命して、木村の日常はますます多忙になった。

減反政策に立ち向かう

仙台市北四番丁通りの路上に、毎朝停まる一台の車があった。木村の自家用車だ。国道四号線の渋滞を避けるため、木村はいつも早朝五時から六時のあいだに中新田の自宅を出発した。出勤が早すぎるとは職員に気を使わせてしまう。勝山公園の近くに車を止め、八時になるまで時を過ごした。

車内が書斎になった。仕事の計画を練り、テーブルコーダーに耳を傾けた。カセットテープのなかには、その日の朝礼や会議で話す予定の文章を、あらかじめ自分で吹き込んだものが録音されていた。セミナーなどで喋った内容を録音し、後から聴いて反省点を探すこともあれば、家族を聴衆に話の内容をチェックすることもあったとい

う。組織にとってリーダーのメッセージがいかにかに重要か、熟知していればこそその習慣だった。

戦後、日本の農業は食生活の変化や貿易自由化など内憂外患の状態が続いていた。

木村が県中央会会長・農協米穀対策中央本部（以下米対本部）副本部長にあった時期も同様で、「水田利用再編対策（減反政策）」や農産物の市場開放論、米価問題に捨て身で向き合わなければならなかった。

昭和五五年夏、異常低温が東北を襲った。不稔が多発し、まったく収穫できない地区さえあった。県内の穀倉地帯を見て回った木村の脳裏に戦前の冷害の記憶がよみがえる。「あの辛酸をふたたび味わうことになるのか……」。

五六年度から始まる第二期水田利用再編対策の転作目標面積は一万七四三〇ヘクタール。「冷害で米が収穫できないのだから、転作面積は減らすべきだ」。木村は、山本壮一郎宮城県知事とともに何度も農水省（現農林水産省）へ出向き、折衝を重ねた。木村たちの熱意が通じ、転作面積は目標の約七十二パーセントまで削減することができた。

木村・山本の連携プレーは五九、六一年度の転作面積削減交渉でも力を発揮し、宮城県は全国一低い転作率を実現している。

とはいえ転作は米どころ宮城にとって辛い決断にはかならず、木村はいつも「どう展開していけば農家が安心して農業に励めるんだろうか」と農家の不安を思いやつ

た。

一方で「転作や減反を避けて通れないのであれば、奨励補助金などを活用して逆に農業生産の拡大を図るべきだろう」と合理的な指針を示すことも忘れなかった。

全国の米価運動の先頭に立つ

「今年はこれで何度目の上京だろう」。昭和五七年に東北新幹線が上野まで開業してからは大分楽になったが以前は片道四、五時間もかかっていた。農政運動のため、朝から晩まで農水省や議員会館をまわり、鶯谷の県農協宿舎に帰るころにはシャツも背広もよれよれになった。

昭和五六年、米対策本部副本部長に就任した木村は、全国の米価運動の先頭に立つて旗を振ることになった。

木村は、副本部長として各都道府県の意見を集約・調整し、代表して何度も政府との折衝に出た。各県の会長に頭を下げて内部の意思統一を図り、闘い方を決めた。宮城の農業者たちの主張を抑え、米对本部の方針に従う道筋をつけることもあった。

昭和五八年の米価運動も例年通り荒れた。政府の据え置き方針に対し、米对本部は、要求米価を物価賃金スライド方式で六〇キログラム一万八七六円とした。

ところが五七年と同じ生産費・所得補償方式で計算すると、二万二九〇六円になる。

県内では「この米価で要求すべきだ」という声があがっていたが、宮城県の考えはすでに木村が米対本部で主張し、少数派の意見として退けられていた。木村は「一度決まったことなのだから、本部の決定に従おう」と根気よく説得を続けた。

木村には、一地域の長としてより、全国の農業者を率いる者として、一段高い視点が求められた。

そんな木村の孤高に打たれるものがあつたのだろう。県米価大会の場で青年部と揉み合いになる木村を、ガードするように立つ若者たちの姿があつた。地元中新田町農協青年部のメンバーだ。「俺たちも暴れたい。しかしおらほの組合長を守るのが先だ」。彼らは中新田親衛隊と呼ばれ、その後の県米価大会でも壇の下で待機するようになる。親衛隊の一人は、「木村会長の泰然自若として自信に満ち、何が来ても除けようとする姿勢に大きなものを感じた」と当時をふり返っている。

百姓は土地がある限り滅びない

「一の肥やしは主の足跡」という言葉を、木村は気に入っていた。少年時代から、良い米をつくろうと泥田を這いずり回り、除草に追われる日々を送ってきた。いつも米づくりに知恵をしぼり身体を動かしてきた。

県中央会のトップになった木村は、良質米づくりの熱意を「日本一うまいササニシ

キ」の展開や「宮城県農協米づくり六〇〇キログラム穫り運動」の提唱へ向けた。運動は、生産者・農協・県経済連が一体となって盛り上がった。

米の消費量の減少や農産物の自由化など逆風が吹き荒れるなか、良質米づくりは「私は百姓」と自負する木村の信念でもあった。

政府は米の消費拡大を目的に、昭和五年から米飯給食を導入していた。木村は県内の米飯給食をさらに推進するため、「給食用米の国庫補助引き上げ」「ササニシキの供給措置」を提案した。こうした動きが功を奏し、昭和六年多賀城市が全国に先駆けて宮城の良質米ササニシキを学校給食に導入。パンと比べて割高になる差額分を県中央会と地元農協、行政が負担する方式は「多賀城方式」と呼ばれ、評判になった。

昭和六一年、木村のもとに「未来の東北博覧会」出展の企画書が届いた。日本の食料基地である宮城の農業と米づくりについて伝える内容だった。当時は良質米奨励金の削減や八・五水害などで県内農業全体が暗いムードに覆われていたが、「萎縮してばかりいてはダメだ。宮城の農家の主張をササニシキに託して明るく訴えよう」と出展を決意した。パビリオン名は「ササニシキ館」とした。

博覧会は昭和六二年七月から仙台市の港地区を会場に開催され、ササニシキ館は稲穂人形のオーケストラやササニシキクイズで好評を博した。博覧会全体の来場者数は約三〇〇万人を記録。予想を超える盛況ぶりに木村は「日本一うまいササニシキのピーアールになった」と大満足だった。

木村が心筋梗塞に倒れ、身罷ったのは、奇しくも博覧会が終了した日の深夜、九月二八日午前一時五五分のことだった。

木村はよく「百姓は土着して生業を立てている。土地と一緒に生存している。土地がある限り、人間が生存する限り滅びはしない」と言っていた。

落ちた葉は根に還ってゆたかな土地となり、そこに土着する者を育てていく。木村秀壽という一葉が落ちた土地はいま県中央会に受け継がれ、次の葉を育てている。